

ぼくの伯父さん

——映画文学人生論

原作・監督：山田洋次（1989年）

出演：車寅次郎 渥美清 脚本：山田洋次 朝間義隆
諏訪満男 吉岡秀隆 撮影：高羽哲夫
諏訪さくら 倍賞千恵子 音楽：山本直純
諏訪博 前田吟
及川泉 後藤久美子 奥村寿子 壇ふみ

明るいのだけが取り柄だからね、あの男は

「男はつらいよ」シリーズは第四十二作『ぼくの叔父さん』で主役が寅さんから甥の満男に変わる。理由は寅さん役の渥美清の体調不良。「体が丈夫なのが取り柄」だったはずの男が六十二歳の高齢で、マドンナへの恋は淡くなり、「明るいのだけが取り柄だからね」と言われるようになる。

主役交替のおかげで家族のドラマとしての深みが増し、奥行がひろがり、訴える力が強まった。と思うのは、加齢により私の体力が寅さんと同じような衰えを感じているせいか。それとも、私も満男とほぼ同年齢の息子がいて、似たような青春の試行錯誤をハラハラしながら見守る経験をして、他人事ではない気がしたからか。

満男は妹のさくらと諏訪博との間に生まれた一人息子で、第二作では赤ん坊だったが、シリーズが回を重ねるごとに成長し、第二十七作「浪花の恋の寅次郎」（一九八一年）では小学生高学年。満男役は中村はやとから吉岡秀隆に交替した。それから八年後には早くも大学受験に失敗して。浪人になり、寅さんの後継者として恋をする年頃だ。このシリーズの映画を連続して観ると、歲月人を待たずをスクリーンの画面で実感できる。

満男の恋の相手は、当時、国民的美少女といわれた後藤久美子が演じる及川泉。葛飾高校で一緒にブラスバンド部にいたが、両親が離婚して、九州佐賀県の高校に転校してしまった。



ぼくの叔父さん

映画文学人生論

満男はうるさく干渉してくる両親に反抗して、家出し、無謀にもオートバイに乗って、佐賀まで彼女に逢いに行く。さくらと博は一人息子の身を心配して、おろおろする。

ところが、まことに都合よく、同じ頃、寅さんが佐賀で行商していた。満男が安宿に泊まると、相部屋の客がなんと寅さんだったのである。そんな馬鹿な。文豪シェイクスピアだって、そこまで安易な筋のつくりかたはしないと思うが、登場人物同士が都合のいいときに偶然の再会をするのは『男はつらいよ』シリーズの特徴であり、観客は誰も文句はいわない。

満男は寅さんに付き添ってもらって、泉の叔母さん（壇ふみ）の家に行き、一泊させてもらう。無鉄砲な旅をしてトラブルも経験したが、得るものもあつた。寅さんのおかげと、あらためてぼくの伯父さんを見直す旅でもあつた。

旅をすれば人間は賢くなる。ま、なかにはそうじゃない奴もいるけどな。満男によく言つとけ。俺の真似はするなって、と寅さんは電話でいう。「これからどちらへ？」と聞かれたら、「風が東から吹きますから、西の方へでも行ってみませんか」と答える。現代の核家族ではこんな伯父さんがいればいいこともある。伯父さんの老後の面倒はみるよと満男はいつてくれるが、どうする？

赤とんぼじつとしたまま明日どうする 風天